



夕夕夕 三三三 七七七 二二二 九九九 以以外

ターは不思議を抱えていた。

ありとあらゆる事象を抱えていた。

まずは自分自身の体について。この手は、どうして腕の伸びたところについて、先割れになっているのか。その枝分かれがめいめい自在に動かすことが可能なのはなぜか。同じようなものが腰から下にもあるのはなぜか。それは、たとえば説明されたところで何の意味もないのだ。脳のどこがどうなっているからとか、神経にどう伝わるとか、そのことが「なぜそうなっているのか」を説明してはいないからだ。好み、という感覚がまさしくそうで、あの味は好きで嫌いというのは突き詰めるとまったく理由が不明であることにターは気づいた。たとえ甘いものが好きでも、なぜ好きなのかについて知る者はいなかったのだ。

自分の手足という不可解な代物が、自分の意志によって動く。

どこぞのものともしれない舌が、自分の喉に根を下ろして敏感に善し悪しを振り分けている。

「わからないままにそれをしている。」

それが不思議で不可解で、つまるところ嫌でならなかった。こんなに気分の塞がれることはない。ターはつねに風糸で首をしめあげられながら、煮え立った葛湯をのまされるような気分でした。

どうして自分は生きているのか。

どうして死ぬのか。

運命というのはどういうことか。

それらを考えぬこうとする時、言葉しか方法がないのはどうしてか。

いつまでも不思議に留まっていたはならない。

そのことはターにもわかっていた。ターははじめ将来有望な子だといわれた。けれどもやがて、屁理屈ばかりこねる面倒な子と呼ばれるようになった。周りの人々は彼に困惑し、幻滅し、疲れ果てた。

人並みになろうと、他のどの子供よりもターは思った。

だからターは学習を怠らなかった。どうにかして自分自身に活路を見出すために、ター以外をよく観察して、その真似をするように心がけた。しゃっくりの発作は、コップの水を二拝してから一息で飲むとおさまる。そういうふうには対処法というものがあるのだと信じた。

要するに、なるべく楽しもうとした。が、中々うまくはいかなかった。友人や恋人ができて、

皆ほどなくして潮が引くようにターの元を去った。

それにはターにも原因があった。ターがター以外を見つめるまなざしには、少なからず軽蔑の気持ちがかめられていたからだ。ただ内心で自分自身の問いかけを押し殺し続けていたターは、そうする以外に自分を保てなかった。物心ついた頃からつけている日記は、いつも同じ文言で結ばれている――悪たれ小僧、お前だけが平気になれ。お前だけが平気になれ。

そんなターをみて、ターの母親はかなしんだ。お母さんと呼んでも返事をせず、その代わり藪蚊を払うような仕草で顔の前で手を振った。

ターの妹であるプーの葬儀のときは、ターの母はとくに露骨に、どうしてお前が逝かなかったのかという目をした。ターの母親は、それからター以外の一人となった。

その晩、ターは父親に人生とは何ですかと尋ねた。

父親は、それは生きてみないとわからないと答えた。

ターは、それじゃあいつわかるのですか、死ぬ間際ですかと尋ねた。

父親は、そうだろうかと答えた。

ターは、では死ぬ間際とはいつですかと尋ねた。息を引き取る、その瞬間でしょうか。何分か前でしょうか。そもそも死というのは、心停止のことなのでしょうか。

父は、それは実際に死ぬ間際、ということではなく、死を覚悟した瞬間から考え始めるということだ。だから人それぞれに答えがある。人生とは何かという問いに唯一の答えなどないのだと答えた。

ターは、それでは人生とは何か、という問いには「死」を知る必要があるということですかと尋ねた。

父はそうだと答えた。

ターは、ならば死を覚悟した子供でも、人生が何かわかるということですか。たとえばプーのように四年しか生きていない人間は、人生を知っているということになります。少なくとも残りの2日、プーは自分が死ぬことを知っていたのですから。そうでないというのなら、やはり大人になってからでしかわからないというのなら、つまるところ誰の人生論も立場に応じた物言いではないのでしょうか。

それに、死が何なのかについても、いまだはっきりしていません。もっともこの問いは、誰にも答えられないはずです。死んでから口をきいた人などどこにもいないのですから。死ははっきりしていない。要するに、死は「ない」のではないのでしょうか。ないことを知れという、それはどうということなのでしょうかと尋ねた。

父はとにかく生きてみる、生きて自分自身の答えを見つけるしかないんだ。死んだプーの分も我々は精一杯生きるんだと答えた。

ターは、どうやって僕らがプーの分も生きるのですかと尋ねた。

父は、幼くして死んだ者の分も力強く生きるというのだと答えた。それが残された人間の義務なのだ。

ターは、よくわかりませんと答えた。

そのター以外は新聞紙を畳んで置くと、まだ中身の残っているマグカップを転がすようにシンクに放り、いいから風呂に入れと答えた。居間を出ていく後ろ姿はあきらかに怒気をはらんでいた。音に驚き、揃って起きてきた二人のター以外は、気の毒そうな顔でターの頭をひとつなでると寝室に戻って行った。

ターはベッドにもぐりこむと、そこで不思議を見つめ続けた。暗くて空気が薄くて、あまり外と変わらない。舌で奥歯のあたりを探ると、少し血の味がした。枕に何度も唾を吐いた。生きているなんて考えたくもなかった。

眠れないまま、目をつむっていると、おなかのあたりにもぞもぞと動く感触があった。

昨年冬にター以外が道ばたで拾ってきたター以外だ。いつも無愛想で毛糸玉を投げてみてもじやれつこうとも乗っかろうともせず、それがどうしたとばかりに裏返ったりする。

そのター以外はミャアとひと鳴きすると、そこが安住の地とばかりに腰を下ろし、眠りはじめた。ターが少し動くと、おなかに湿った鼻があたった。

ターはター以外と同じ形で、いつのまにか眠っていた。